

主 題：福音はあなたの宝物か？

聖書箇所：マタイの福音書 13章44-46節

新約聖書マタイの福音書13章をお開きください。我々は主イエス・キリストが天の御国に関して語られた七つの例え話を見ている。神のみわざがなされる時には敵であるサタンの妨げの働きもなされるのだということを見れば私たちに教えています。前回、福音の種が蒔かれる時にはサタンは福音の真理を惑わす働きをなすということを見ました。よい麦が蒔かれるとそこに毒麦が蒔かれるということを見ました。その当時も、そして約2000年たった今も、偽りの福音が神のメッセージとして伝えられているのを我々は知っています。

☆福音の真の価値

今朝私たちはこの福音の真の価値を学びます。願わくばこの学びを通して次の二つのことをあなたに問いかけたいと思います。

A. あなたは福音を真に価値あるものとして捉えているか。

B. あなたは福音を真に価値あるものとして扱っているか。

44節のみことばをごらんください。七つのうちの5番目と6番目の二つの例えになります。

1. 畑に隠された宝 44節（五つ目）

44節「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。」、地中にある宝を発見した人がその宝が埋められている畑を購入するという例えです。私たちが例えというものを学ぶ時に覚えなければいけないのは、そのメッセージを聞いた人たちに、伝えたい真理がより明確になるために例えが使われているということです。例えを聞くことによって、より真理が複雑化したとか、わからなくなったとしたら、その例えを用いた意味がない。ですからイエス様がこの話をなさった時に、これを聞いていた人々は恐らくあなたや私以上にイエス様がお話になろうとしていたことを酌み取ったということです。この地中に物を隠す、特に貴重品を隠すという例えを当時の人々がよく理解したというのは、実は当時の人々には大切な物を地中に隠すという習慣があったからです。このパレスチナという土地は、常に戦場とされてきたところです。そこで人々は自分が所有する貴重品を地中に隠して、戦火が収まった時にそこに戻ってきて掘り起こす、そのことを願いながらみんな戦火を逃れて避難したのです。ですからこの例えを聞いた時に、彼らは我々以上にその意味がわかったのです。

この例えを読んだ時に、ある方はきっとこういうふうにも思うと思います。だれかの畑にいて掘り返してみたらそこから宝が出てきたら、その宝は土地の所有者のものでしょうか？それをかすめてはいけなんでしょう？と。本来ならば、土地の所有者のところへ行ってこういうのを発見しましたよと報告をして、ありがたうで終わるような話ではないのかと思います。この話を見た時に、宝を見つけたこの人はそれを隠しておいて、その畑全体を買って宝を自分のものにする。ちょっとこれは果たして合法的なのかどうかと、今の我々は思ったりもします。もし皆さんがそう思っておられるとしたら、ぜひ心配しないでください。合法的なことをしたのです。この当時のパレスチナは当時世界を支配していたローマの支配下にありました。ですからローマの法律が彼らにも適用されたのです。ただし日常のささいなことに関しては、ユダヤ人たちの律法がそのまま適用されていたのです。そして、ユダヤのラビの律法には「物を見つけた場合、何が見つけた人のものとなり、また、何が申告されなければならないのだろうか？もし散らされた果実や散らされた金を見つけた人があるならば……それは見つけた人のものである。」と記されています。ですから合法だったのです。もちろん戦火を逃れて避難するのですが、その方がそこで亡くなる可能性もある。だから畑を掘っていると宝が出てきてその土地を買えば、それはその人のものになることは当時の人たちはよくわかっていたはずなのです。

イエス様はこの例えをもって何を伝えたかったのかと言うと、地中に埋められていた宝を見つけた人は全財産を支払ってこの宝の埋められていた土地を買うということです。非常に単純な話ですが、でもそれがこの例えをもってイエス様がお伝えになろうとしたことです。今の私たちも読んでいて言わんとしていることは酌み取れます。

2. よい真珠を見つけた人 45-46節（六つ目）

二つ目の例え、45-46節を見ると、「また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。すばらしい値うちの真珠の一つを見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」と。今も当時も真珠というのは大変高価で貴重なものでした。パウロが女性に対して「女も、つつましい

身なりで、控えめに慎み深く身を飾り、はでな髪の色とか、金や真珠や高価な衣服によってではなく、むしろ、神を敬うと言っている女にふさわしく、良い行ないを自分の飾りとしなさい。」と I テモテ 2:9-10 で言っています。パウロが言いたかったのはそういう外面的なものではなくて、大切なのは内面的な話だということです。どういうものを身につけるかよりも、どういう心なのかが大切だと言います。ただここで「はでな髪の色とか、金や真珠や高価な衣服」と書かれてあるように、真珠というのは非常に価値のあるもの、値打ちのあるものであったことを伺い知ることができます。商人たちは美しい真珠を求めて世界じゅうの市場を回っていたのです。そしてその真珠を見つけた時には、すべてのものを売ってそれを手に入れようとする、これがこの例えが言わんとしていることです。どちらも読むとその真理というものを我々が酌み取ることができます。

3. 二つの例えの比較：

さて、この二つの例えを少し比較をしてみましょう。というのは相違点と共通点を見ることができるからです。それを私たちは学んでいくのですが、この宝や真珠は何を指しているのか——。これは福音です。なぜならこの例えはすべて天の御国の話です。どうしたら永遠のいのちを得るのか、天国に行くことができるのか、その話をイエス様はしておられるのです。ですからこの宝や真珠は福音のことであり、信仰によって救われる良き知らせのことを言うのです。

1) 相違点

この二つの例えのどこが違うのかというと、宝を発見した人は実は宝を探していたわけではなかったけれども、真珠を発見した人は真珠を探していたということです。

(1) 「宝を探していない人」：

ではこの宝を探していなかった人というのはどういう人かと言うと、恐らくこれは福音や救いに関心がなかった人、もっと言えばその必要を感じていなかった人のことです。それでいて究極的にこの救いへと導かれていくのです。そんな人がたくさんいます。その中のひとりがあるパウロです。パウロは救われていない時に、自分は救われていると確信していた人物です。今この瞬間に自分のいのちが取られたとしたら 100%間違いなく私は神のところに行くという確信を持っていた人物です。なぜかと言うと、彼は神の律法をことごとく守っていたと言っています。彼は神の律法を守りさえすれば、この律法に基づいて正しい行いをしていけば、私は間違いなく天国に行くことができると考えていたのです。行いによって天国に行ける、救われるのだと信じて生きていたのです。

ところが、そうではなかったということに彼は神によって気づかされるのです。ガラテヤ 2:15-16 にパウロ自身のあかしが記されています。「私たちは、生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません。しかし、人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもないからです。」とあります。律法の行いを通して救いにあずかるのだ、神が喜ばれること、神が命じておられることをことごとく守りさえすれば罪の赦しをいただくことができ、天国へ行くことができると信じていたパウロは気づいたのです。彼の大きな間違いは神の命令をことごとく守ることができると信じていたことでした。皆さんもご存じのように律法が与えられたのは、私たちはどんなに努力をしても、どんなに心を変えようとしても神が要求しておられる、その教えを守ることができないのだということを悟らせるためです。でも人々は私は守っていると思ったのです。だからイエス様が公の生涯を始めた時にこのようなユダヤ教を信じて救われていると確信している者たちに対して、行いではなくて心を指摘しました。あなたたちは神の前に正しいと思っているし、あなたたちは今死んでも天国に行けると思っているけれども、残念ながらそうではない。なぜかと言うとあなたたちの心が正しくないからと。パウロがこうしてあかしをしてくれているように、自分は救われていると確信していながら、実は救いというのは行いによって得ることはないのだということの主から教えられるのです。

そこで、「ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。」と。この「知った」というのは個人的に知ることです。つまり個人的に主イエスを受け入れたということです。イエス・キリストを信じる信仰以外に救いにあずかる道はないことを知ったゆえに、彼はそれを受け入れたと言うのです。時代がどう移り変わろうと、どの場所に我々が生きていようと、神のメッセージは変わっていないのです。イエス・キリストを心から信じる者を神様は救ってくださるのです。イエスを信じる信仰によってのみ私たちは救われるのです。どんな行いによっても救いにあずかることは絶対がないということです。ですからパウロを見た時に少なくとも彼は救いを求めていたわけではなかった。救われていると確信していたのです。

去年の秋に、長いこと行きたかった北海道の旭川に家内と行って来ました。なぜ旭川に行きたかったのかというと、一つは三浦綾子さんの記念館を訪れてみたかったからです。もう一つは「塩狩峠」というところに行ってみたかった。私も中学生のころだと思いますが、初めてそれを読んだ時に感動を覚えました。多くの皆さんはお読みかと思えます。もう今から111年ほど前、明治42年2月28日に札幌に向かっていた汽車に乗っていた長野政雄という人は、最後尾の客車がそこから離れて逆走している中であって、乗客を助けるためには自分の身を挺するしかない。そして自分を犠牲にして乗客を助けたという話です。その記念碑が立っています。このすごい信仰者、私も子どもながらに思ったのですが、この人がどんな人だったのか——。亡くなった時にすべて消去してくれという彼の遺言で、残念ながら彼が書いた日記や手記は一切残っていないのですが、彼のことを知る人たちが彼についていろいろなことを語ってくれています。こう書かれていました。「彼は代々仏教徒の家に育った。そして彼はキリスト教を邪教とみなし、容易に信仰に入ることはないと思われた。」、私たち多くの日本人と同じようにそんなふうに使っていたのです。でも神様は彼を救われ、神の栄光のためにお用いになった。神の真理を求めていたわけではなかったけれども、でも神が私たちのうちに働いて、この救いへと導いてくださった。この中にもそういう方がたくさんおられると思います。私もその中のひとりです。

救われていると思っていた当時のことを考えてみると、一体私は何を根拠に救われていると思っていたのか——。当時はそんなことも考えていませんでした。この世の法律を犯したこともないし、いい人間として生きていると思っているし、死んでも間違いなく天国に行けるのだと自分で思い込んでいました。ですから君はきょう死んだらどこに行くのだと聞かれたとしたら、自分勝手な根拠に基づいて、私は必ず天国だと答えていました。それが真実かどうかは確かめることはなく、ただそのように信じて生きていた。でも感謝なことに神様はそんな私のうちに働いてくださって、この救いへと導いてくださった。そしてあなたもその中のひとりかもしれない。宝を探していなかったけれども、宝を見つけた人、そういうカテゴリーの中に私たちも入るでしょう。

(2) 「真珠を探していた人」：

もう一つは一生懸命救いを探していた人。もちろんこの救いを探すことも神のみわざであるということは皆さんご存じだと思います。なぜなら我々は生まれながらにしてだれひとりとして神を求めないからです。でも確かにそういう人々に神様が働いて彼らの心を開いてくださったという話が聖書の中に幾つも記されています。

① コルネリオ

何人かご紹介したいので、使徒の働き10章を見てください。使徒10:1にはコルネリオという人物の話が出てきます。「カイザリヤにコルネリオという人がいて、イタリヤ隊という部隊の百人隊長であった。」とあります。2節には「彼は敬虔な人で、全家族とともに神を恐れかしこみ、ユダヤの人々に多くの施しをなし、いつも神に祈りをしていた」と。そして彼が夢を見ます。シモン、つまりペテロを呼びなさいと。同じころペテロ自身も夢を見ます。それは大きな敷布のような入れ物が天から降りてきて、そこにいろいろな種類の動物がいたことが11節以降に書かれています。「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい。」と言われたペテロは「きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」と答え、「神がきよめた物を、きよくないと言ってはならない。」というやりとりがあるのですが、一体あれは何だったのだろうと思いつめがらしている時に、コルネリオから遣わされた人たちがやって来るのです。

そして17節、ペテロと一緒に来てくれるように頼むのです。コルネリオから遣わされた人々が22節にこんなことを言います。「すると彼らはこう言った。『百人隊長コルネリオという正しい人で、神を恐れかしこみ、ユダヤの全国民に評判の良い人が、あなたを自分の家にお招きして、あなたからお話を聞くように、聖なる御使いによって示されました。』」と。ペテロはこれは神がなしておられるみわざであるとわかったのです。そして彼はカイザリヤへと出て行くのです。そしてペテロも何が起こったのかコルネリオに話をします。そしてこのコルネリオとその家族の者が神様の祝福にあずかるのです。少し飛ばして44節「ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。」、神のみわざ、救いのみわざがなされたのです。こうしてこのコルネリオという人物を神様はお使いになった。そして彼にすばらしい救いの祝福をお与えになったのです。

② ルデヤ

また少し進んで16章を見てください。パウロたちはこの後、ヨーロッパへと宣教を進めて行きます。そして16章になると、彼らがネアポリスからピリピという町に移動していく様子が11節に出てきます。ピリピという町に入った時に、そこでパウロたちは福音のメッセージを語るのですが、14節に「テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの

語る事に心を留めるようにされた。そして、彼女も、またその家族もバプテスマを受けたとき」、彼女は自分の家にとどまってほしいと言う話が出てきます。つまりこうしてこのルデヤも信仰に至るのです。見ていくと、彼女も「神を敬う」存在であったと。でもその真理を正しくわかっていなかったのです。

③ 看守

同じ16:29を見ると、ピリピで働きをしたパウロとシラスは捕らえられます。鞭を打たれた上で収監されるのです。そうすると大きな地震が起こって獄舎の土台が揺れ動いて扉がすべて開いてしまった様子が26節に出ています。「**みな**の鎖が解けてしまった。」と。そこでこの看守たちは自害しようとするのです。パウロたちは「**自害**してはいけない。私たちはみなここにいる。」と、だれひとりとして逃げていなかったのです。おもしろいですよね、その後看守たちはその中に入ってきて、30節「**ふたり**を外に連れ出して『先生がた。救われるためには、何をしなければなりませんか。』と言った。」とあります。なぜこんな質問を唐突にするのでしょうか。明らかにこの看守たちはパウロたちの様子を見ていたからです。牢屋の中でパウロたちが別の囚人たちに話している話の内容も聞いたでしょう。鞭打たれて傷を負っているにもかかわらず、その中で神を賛美している様子を実際に見たのです。そして神は彼らの心を開かれて、そしてイエス様のこの福音を受け入れて行くのです。31節「**主**イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」、そして彼とその家の者全部に「**主**のことばを語った。」と。「看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、そのあとですぐ、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。」と。この看守たちもその家族も救いにあずかったと。

④ ベレヤの人々

もうひとり、使徒17:10節に進んでみてください。パウロたちはピリピの町を出て、次に向かったのはテサロニケという町です。そしてテサロニケから次に移動したのがベレアという町です。その話が10節から出てきます。「兄弟たちは、すぐさま、夜のうちにパウロとシラスをベレアへ送り出した。ふたりはそこに着くと、ユダヤ人の会堂には行って行った。ここのユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」、つまりパウロがメッセージを語った時に、彼らは聖書を引き出して、聖書を見て、それが本当に聖書の語っていること、そのものかどうかを吟味したのです。ただの人間の話なのか、神のメッセージなのか――。12節「**そのため**、彼らのうちの多くの者が信仰にはいった。」。人々は神に対して明らかに心を閉ざしていたのではない、もう私は救いなんか要りません、間に合っています。そういう人ばかりではなく、こうして真理を求めている人たちもいたのです。そういう人々に確かに神は働いて彼らを救いへと導かれた。救いにあずかった者たちの中には、こういう人たちが存在します。全く無関心であって神が導いてくれた人、やっぱり何かおられるのだ、何だろうと考えていてこの救いへと導かれた人。

2) 共通点

確かにこういう相違点はあるのですが、共通点もあります。

(1) 喜んだ

畑で宝を見つけた人も、真珠を見つけた人もどちらも宝を見つけた時、真珠を見つけた時に喜んだということです。どちらもそれを見て喜んだのです。

(2) それを得ることを願った

(3) 犠牲を払った

(4) 宝を得た

適応：

(1) 「喜んだ」

まず最初に喜んだのです。イエス様をお信じになっておられる皆さん、あなたも少し思い出していただきたいのは、イエス・キリストの福音を聞いた時に、もちろん初めて聞いてそう思ったかどうかは個人差はあるのですが、イエス・キリストの福音の素晴らしさを確実にあなたは知ったはずです。何と神様がこんなにすごいことを私のためにしてくださったのだと。この神の救いがどれほど価値あるものなのか、そのことに気づいた時があるはずです。ちょうどこの人たちが畑に埋められている宝のすごさに気づいたように。自分が探していた真珠よりもはるかにすばらしいような最高のもの見出した時のように。

パウロがそのことについてあかしをしてくれています。ピリピ3章で自分が人間的に自慢できることを記しています。どんなことを自慢できたかというと、彼自身の家系を自慢することができました。民族を自慢することができた。いろいろなものを自慢することができたのです。人間的に誇れるものが幾つもあったのです。パウロは言っています。私はユダヤ教の教えに基づいて「八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きっすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心

は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」、ピリピ3：5-6です。これまでのパウロはそれを自慢できたし、人々はそれを聞きながらすごい人だと思ったのです。パリサイ人や律法学者というのは学者です。大変な高い教育を受けているのです。ある種ユダヤ人たちがイエスを尊敬しなかったのはイエスにそういう教育がなかったからです。でもパウロは違った。最高の学者から学んだエリート中のエリートです。ですからそういうことは多くのユダヤ教徒たちにとっては憧れの的でしたから、彼自身もそれを自慢できた。ところがその後、彼はこんなことを言います。「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。」（ピリピ3：7-8a）と。私が今まで大切だと思ってきたことがイエス様を信じた時に全くそれが逆転したと。価値あると思っていたものが実は神の前に価値のないものだということがわかったのです。そんなものよりもはるかにすばらしいものが存在することを知ったのです。救いです。ですから「キリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに」とピリピ3：8で言っています。つまりイエス様を個人的に知っている、信じている、そのすばらしさのゆえに、この救いがどんなにすばらしいものなのか、この世のいかなるものよりもはるかに優れたものであるということのパウロ自身が告白するのです。

パウロはすごい宝を見つけたと喜んでいたので。私の想像をはるかに超えるものだ、こんなすばらしい救いを神が備えてくださった。創造主なる神が、神に逆らい続けている被造物である私たちのために人としてこの世に来てくださり、ご自分の罪のないのちを犠牲にしてくださり、完全であり、永遠である救いを備えてくれた。ここに本当の救いがあるのです。我々が探し続けているその答えがここにあるのです。このイエス・キリストによって生まれ変わるのです。このイエス・キリストによって新しく造りかえられるのです。すべての罪を赦していただけるのです。これは私たちが勝手に思いついた救いの道ではなくて、創造主なる神が私たち人間のために備えてくださった唯一の道です。それを知った時に、パウロはこれに勝るものはない、こんなすばらしい宝がある、そのことを彼は喜ぶのです。あなたは救いをそんなふうにとらえておられます？神が私に下さったこの救い、これよりも勝るものは存在しない。これこそが私にとって最も価値あるものだと。

（2）「それを得ることを願った」

この二つの例えで、宝を見つけた者も真珠を見つけた者もこの宝を得ようと願うのです。救いというのは個人のものだということです。宝を見つけたその人がそれを欲しいと願うのです。真珠を見つけたその人がそれを欲しいと思うのです。たとえすばらしく神を愛する、神を敬う家庭に生まれたとしても、だからと言ってあなたに救いが約束されたわけではありません。確かにそのことによってあなたは幼いころから福音を聞くチャンスがあるし、神の御働きを見ることができます。でもだからといって救いにあずかったわけではない。救いにあずかるためにはあなた個人がイエス・キリストの救いを受け入れることが必要なのです。ちょうど彼らがその宝を見つけて喜ぶだけではなくて、その宝を自分のものとしたいと願ったように。

ペテロがコルネリオの家で神の一連の働きを知った時にこんなことを言っています。「イエスについては、預言者たちもみな、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しが受けられる、とあかししています。」（使徒10：43）、イエス・キリストを信じるならば、だれでもその人は救いにあずかるのです。ただしそれはあなた自身が、あなた個人がなさなければならない決心だということです。

（3）「犠牲を払った」

三つ目に私たちが見たのは、犠牲を払ったということでした。宝、真珠を得るために喜んですべてのものを売り払ったと記されていました。なぜかというと、この宝こそが、この真珠こそが最も尊いものだから、価値のあるものだからです。だから喜んでそれを得るために自分のすべてのものを犠牲にしようとするのです。

① 持ち物よりも

あるひとりの役人がイエス様に質問をしました。「尊い先生。私は何をしたら、永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」（ルカ18：18）と。その時イエス様は「戒めはあなたもよく知っているはずですが、『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。父と母を敬え。』」すると彼は言った。『そのようなことはみな、小さい時から守っております。』イエスはこれを聞いて、その人に言われた。『あなたには、まだ一つだけ欠けたものがあります。あなたの持ち物を全部売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。』（ルカ18：20-22）とイエス様は言われました。そして23節「すると彼は、これを聞いて、非常に悲しんだ。たいへんな金持ちだったからである。」とあります。

イエス様は何を言われたのか——。ではなぜイエス様は律法を守れと言ったのか——。そのように彼が信じていたからです。そして彼にとってはこの救いよりも大切なものがあつたのです。そのことを彼に気づかせようとするのです。永遠のいのちを求めていたかもしれない。でもそこには条件があつたのです。イエス様の問いかけは財産と救いのどちらがあなたにとって重要なのかということです。彼にとって財産の方が重要だつたのです。だから「悲しんだ」とあります。自分にとっての宝物を犠牲にすることはできなかったのです。

ということは、このイエス様の救い、この福音はあなたにとってどれほどの価値あるものなのかです。あなたの持ち物よりも、あなたの愛する者よりも、あなた自身よりも価値があるのでしょうか？先ほど私たちが見たパウロの告白ですが、自分にとって得であると思つていて、自慢できると思つていたことが実はすべてそうではなかつた。彼は「いっさいのことを損と思つて」といふと、先ほどピリピ 3：8でお読みしました。その同じ8節の後半には「それらをちりあくたと思つて」といふとあります。それをごみだとパウロは言うのです。これまで自分が積み上げていた人間として自慢できるすべてのことです。自分の家系もそうだし、自分の民族も宗教も学問もすべて。でも神の前では、この救いと比較したらそれはごみだと。なぜかわかるでしょうか？自慢してきたすべてのものはその人を罪の救いへと導かないからです。どんなに人々がそれを褒めたたえたとしても、そこに救いがもたらす力がなければ、一体それは何かということです。

まさにイエス様はマタイ 16：26で「人は、たとひ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」と言われました。どんなに宝を積んでも、どんなに名誉を得ても、永遠のいのちがなければそれで終わるのです。そこには永遠の滅びしかない。この例えを使ってイエス様がお話になろうとしたのは、あなたにとってこの救いが最も大切なものなのかどうかということです。持ち物よりも救いが尊いと信じている人は恐らくすべてを感謝して、そのすべてを主のために用いようとするでしょう。なぜなら私たちが持っているものはすべて神が私たちに託してくれたものでしょう？イエス様を信じたあなたに神様は霊的な賜物を下さつたし、財産もあるかもしれないし、いろいろなものがある。それは神があなたに託してくださつたものであり、そしてそれをあなたが神のために使うのなら、あなたは天に宝を積む。地上に積まれた宝は全部残していかなければいけないのです。でも天に宝を積んだ者はそれを永遠に楽しむことができる。

② 愛する者よりも

また、みことばは私たちにあなたはあなたの愛する者たち、あなたの家族よりも私を愛するかと。マタイ 19：29に「また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」とあります。イエス様が言われることは、あなたは家族を捨てて、彼らから離れなさいと言つていてのではないのです。私たちは親を愛するのです。家族を愛するのです。でも問われていることは、その愛する者たちよりも私を愛するかということです。

この例えが私たちに教えてくれたことは、彼らは宝を見つけた時に、真珠を見つけた時に、すべてのものを売り払つてそれを手に入れようとしたのです。神が私たちにこの救いについて言われていることは、あなたは自分のすべてを捨てて私を信じるか——と。それは神様、私は私のすべてのものよりもこの救いに価値があると告白しているのです。

先ほどもお話しした塩狩峠で殉教された長野兄弟、彼の信仰についてその家族がこう言っています。「ただ神を信じ、無条件で神に従つていく信仰であつた」と。ただ神を信じ、無条件で神に従つていく信仰者が彼だつたと。彼にとってはこの世のすべてのものよりも神が大切だつたのです。彼はこの世の愛する人々や家族やありとあらゆるものよりも神を心から愛していたのです。イエス様が言われることは同じことなのです。あなたにとって私はどんな存在なのかと。あなたにとって最も大切な、あなたのすべてを投げ出しても得たい存在なのか、それほど価値ある存在なのか、それともあなたには私よりももっと大切な存在があるのかどうか——。

イエス様が私たちに教えてくださったメッセージは、この世が教える御利益宗教ではありません。人々が、そして我々もかつてそうでした。この宗教はこういうことを私たちに約束し、こつちの宗教はこういうことを約束する。では自分にとって何が一番得することなのか——。御利益宗教はそうでしょうか？でもイエス様の教えてくださった福音とは全く逆です。イエス様が言われているのはあなたは私のために何を犠牲にするかです。世の中の宗教は何を得ることができるかを言います。これが欲しいからこれを信じましょうと。ある人々があなたの生活はそのままにして、ただイエス様を加えたらいいと。あなたは今までと同じように生きて、ただ神様を信じたらいい。そうしたら救いにあずかると。そんな福音が聖書の中のどこに記されているかです。今まで私たちが見て来たように、主が教えてくださつて

いるのは、あなたは私を信じるために、この福音を信じるために喜んですべてのものを捨てることができるか——。それはこの救いがどんなに価値あるものかが本当にわかっているかどうかです。イエス様が言われたのは狭い門から入れ、そこから入る人は少ないことを言われています。みんな自分を犠牲にしたくないからです。でも実はそれは本当は犠牲ではないのです。神が下さった人生、神が下さったいのち、神のために使おうとすることは愚かな選択ではなくて賢い選択なのです。

(4) 「宝を得た」

この例えが私たちに最後に言ってくれたことは、そのときに犠牲を払った彼らはその宝を得たのです。ちょうど私たちもこうして本当の救いにあずかるのです。その宝を得た時の彼らの喜びというのは計り知ることにはできない。私たちもこのすばらしい救いを見て、この福音を知って、そしてその福音を心から得たいと思って、自分のすべてを捨てても私は神様、あなたに従いますとその決心をした時に神が約束された祝福を私たちにいただいた。主が持つておられた喜びを私たちもいただくことになったのです。恐らくその喜びは私たちの中で、いろいろな働きをなして、このような喜びをもたらしてくださる神を伝えるという働きに導かれていくでしょうし、同時に救いにあずかったことを感謝しながら生きるという生活をその人に与えていくでしょう。このすばらしい宝を得た人々は、その喜びを伝えるのです。黙ってられないのです。最高の宝、救いを得たからです。

◎ 「主イエスを信じなさい。そうすればあなたは救われます」

最後に、ジョン・ハーパーという牧師のお話をして終わります。

1912年4月14日日曜日、ジョン・ハーパー牧師はアメリカのムーディ教会に招かれてシカゴに向かっていました。大西洋上をアメリカに向けて航海していた。その巨大客船が氷山に接触して沈没した。その船の名前はタイタニックです。映画化もされ、多くの人たちがそのストーリーはある程度知っているでしょう。歴史もそのことを明らかにしています。ただ多くの皆さんが知らないことがあるのです。それはその船にひとりの牧師が乗船していたということです。

生存者のひとりがその船が傾きかけた時に、このハーパー牧師が大声で「女性たちと子どもたち、そして救われていない人たちを救命ボートに」と叫んでいるのを覚えています。それは救われている者たちは死の備えができていますが、不信者はそうでないことを知っていたからです。彼は自分の身につけていた救命道具をまだ救われていない人に譲ってあげたのです。自分は何があってもどこに行くのかわかっているから。このハーパー牧師は甲板の上を移動しながら人々に主イエスを信じるように、イエス様に心から立ち返るようにと懇願していたと。彼はタイタニックのオーケストラに「主よ、身元に近づかん」を演奏するように求めたのです。その賛美歌が流れる間彼はひざまずき、神の喜びにあふれた顔で祈りを捧げます。船が沈み始めた時、彼は氷の海に飛び込み、最後まで人々に主イエスを信じて救われるようにと語り続け、そして遂に低体温症によって彼のからだは海底へと沈んでいくのです。

この出来事から4年後にカナダのハミルトンでもたれた生存者の集いで、アグイラ・ウェブさんは次のように語っています。「私はタイタニックの生存者です。私がああ夜、ひとりで漂っていた時、船の残骸とともにハーパー牧師が流されて私のもとに来られました。その時彼は私に『あなたは救われているか？』と尋ねられました。『いいえ、救われていません』と言うと、彼は『主イエスを信じなさい。そうすればあなたは救われます』と答えられました。波が彼を私から遠ざけたのですが、不思議なことにはしばらくすると再び波が彼を私の近くに返してくれました。その時彼は再び『今、あなたは救われていますか？』と尋ねました。私は『いいえ』と答えました。うそをつきたくなかったからです。そこで彼は再び私に『イエス・キリストを信じなさい。そうすればあなたは救われます』と言われました。その後すぐに彼は海中に沈んでいきました。その夜海上で私は信じました。私はジョン・ハーパー牧師の最後の信者です。

彼はいのちがけで福音を語り続けたのです。なぜか——。その価値を知っていたからです。きょう私たちはイエス様の例えを見てきました。私たちはこの福音の価値を、この救いの価値を本当に知っているのでしょうか。この主のために喜んでいのちを捨てる、そんな思いを持って主に従っているのでしょうか？多くの信仰者たちは今もいのちがけでキリストの福音を伝えようとしています。つい最近もナイジェリアでひとりの牧師が誘拐されて、何度もビデオでメッセージを送りました。そのメッセージの中には、私は私の妻と家族と同労たちにみこころなら会えるでしょう。でもそうでなくても、主のみこころがなされることを信じている。彼はそのような中で落胆することはなかった。何があってもキリストの救いを拒むことがなかったゆえに、つい数日前のメッセージでは彼は殉教したと。みんなわかっているのです。この福音の価値を。ここにしか救いはないのです。問題はあなたや私とその価値をわかっているかです。願わくばこのメッセージが皆さんひとりひとりの心にチャレンジを与えてくださるよう。私にとってこの福音がどれほど価値のあるものなのか——。主があなたの心を探ってくださいることを願います。